

品詞分類のありかた
—シネヘン・ブリヤート語の事例から—

山越康裕
(札幌学院大学)

How Should We Classify Words?
—Word Classification in Shinekhen Buryat—

YAMAKOSHI, Yasuhiro
Sapporo Gakuin University

Shinekhen Buryat, a Mongolic language spoken in Inner Mongolia, is one of the 'typical' agglutinative languages. In this language, nouns do not usually take any conjugational suffixes, nor do verbs take any case suffixes. It seemed to be easy to classify its words into parts of speech morphologically. However we can find some kinds of words difficult to classify. To classify these words 'objectively', I will point out that it is important to define 'STEM' with its inflectional/case paradigm.

It is clear that STEM definition for word classification is not so effective for all languages. For example, it is of no use for isolating languages like Chinese. But we can consider that Chinese has some parts of speech, so that Chinese speakers can distinguish Noun/Verb without any morphological clue. If the speakers distinguish, there must be some differences not morphologically, but syntactically or semantically or functionally. So, it is important to classify words into some parts of speech for grammatical description.

キーワード：品詞，モンゴル諸語，シネヘン・ブリヤート語，語類

Keywords: Parts of speech, The Mongolic languages, Shinekhen Buryat, Word class

1. はじめに
2. シネヘン・ブリヤート語における品詞分類の概要
3. 分類上の問題
4. 語幹の認定
5. 品詞の存在と分類の必要性
6. おわりに

1. はじめに

シネヘン・ブリヤート語¹は中国内蒙古自治区北部に位置する呼倫貝爾市（ホロンバイル市）の錫尼河蘇木（シネヘン村）を中心に居住するブリヤートおよびハムニガン・エヴェンキの人々、約 6,000 人によって使用されるモンゴル系の言語である。話者のほとんどは中国語、モンゴル語も使用するポリグロットであり、読み書きには中国語、モンゴル語を用いる。周辺のモンゴル系の諸言語同様、シネヘン・ブリヤート語は膠着的性格の強い言語であり、語の派生や文法関係の標示は接尾辞、後倚辞の接続によってあらわされる。これらのモンゴル系言語の多くは格語尾類、活用語尾類を語幹に接続することによって文法関係を明示する。その際、どちらの語尾類を接続しうるかによって名詞類と動詞とが明確に、かつ相補的に分類される傾向がある。シネヘン・ブリヤート語もその傾向が強く、名詞類と動詞との分類、またその他の語彙との区別はかなりはっきりとしている。そのような点で、シネヘン・ブリヤート語やモンゴル語のような言語は品詞分類においてそれほど問題のない言語である。

ただし、そういった明確な区別をもちながらも品詞分類には若干の問題がみられる。そこで本稿ではシネヘン・ブリヤート語の品詞分類方法について検討し、その問題について取り扱ったのち、当該言語では形態的基準による品詞分類が十分可能であることを再確認する。そのうえで、分類基準は言語によって異なるものの、品詞分類もしくはそれに準ずる語類の分類が文法記述に際し必要であることを主張する。

2. シネヘン・ブリヤート語における品詞分類の概要

モンゴル諸語では、研究者によって細部は異なるが、一般にロシア語文法の影響を受けた品詞分類がとりいれられている。たとえば、モンゴル語文法書としてひろく引用される Luvsanvandan 編 (1966) は次頁表 1 のように分類している。

とくに、動詞をその統語機能に応じて「形動詞」（名詞修飾および叙述機能をもつ）・「副動詞」（動詞修飾機能をもつ）・「定動詞」（叙述機能をもつ）に下位分類する方法は、モンゴル諸語だけでなくロシア領内で話されるアルタイ諸語や、その他少数民族言語の文法記述にも用いられている (cf. 江畑 2006:29)。

¹ 当該言語の音素目録は次のとおりである。カッコでくくられている音素は借用語彙にのみあらわれる：母

音 *a, o, ə, e, u, ø, i*, 子音 (*p*), (*pʰ*), *b, bʰ, t, tʰ, d, dʰ, (k), (kʰ[c]), (c[ʧ]), (cʰ[tʃ]), s, sʰ[ʃ], z, zʰ, x[x-χ], xʰ[ç], g[v~β]*,

gʰ[ǰ], h, l, lʰ, r, rʰ, m, mʰ, n, nʰ[n], *ŋ*。

形容詞が名詞とともに名詞類の下位分類に含まれている点も、伝統文法からの影響が考えられる。

この品詞分類は「語幹」を分類の対象としているのか、または「語（語幹+語尾）」を分類の対象としているのかが明記されていない。下位分類では語尾をともなった「語」を対象としていると思われるが、その他においては語幹を対象としているように見受けられ、整合性を欠く。

表1 Luvsanvandan編(1966)におけるモンゴル語の品詞分類

品詞	おもな下位分類
名詞類（格語尾を接続する語類）	名詞，形容詞，数詞
動詞（活用語尾を接続する語類）	形動詞，副動詞，定動詞
副詞（動詞を修飾する語類）	
代詞	代名詞，代動詞，疑問詞など
後置詞（他の名詞を受ける語類）	
小詞（付属語）	
接続詞	
間投詞	

さらに、この分類は以下の2点においても問題が残る。

- A. 名詞類，動詞の基準（特定の語尾を接続するか否か）に比べ、それ以外の品詞分類の基準が不明確である
- B. 「代詞」が品詞間を横断する形で設定されている

A にかんして言えば、もっとも問題となるのが「副詞」である。モンゴル語を含むモンゴル諸語では、「形容詞」が名詞・動詞双方を修飾することが可能なため(1)、「動詞を修飾する」という統語的基準から副詞を設定することが難しい。また後置詞が格語尾を接続することができる点(2)も、名詞類の定義と重なってしまう。

- (1) *ixe* *xubuun.* / *ixe* *xaraa-g-aa.*
 大きい(A) 息子 / 大きい(A) 叱る-E-IPFVP
 「長男」 / 「ひどく叱った」
- (2) *ger-ei* *sco.* / *ger-ei* *sco-hoo.*
 家-GEN 中に(POP) / 家-GEN 中に(POP)-ABL
 「家の中に」 / 「家の中から」

B は基準にかんしては明確である。ただし他の品詞が（その基準の不明確さによって重なる部分があることは措くとして）相補的に分類されているのに対して、代詞はさまざまな品詞にまたがって存在しており、性質がことなる。

こうした分類上の問題をふまえ、山越 (2006:276) ではシネヘン・ブリヤート語の品詞を表 2 のように分類した。この分類においては、「語」ではなく「語幹」を分類の対象に据えている。この点で、Luvsanvandan 編 (1966) に比べ整合性のある分類となっている。

表2 山越 (2006) におけるシネヘン・ブリヤート語の品詞分類

	品詞
変化詞類	名詞類（曲用語類）：名詞，代名詞，形容詞，数詞，後置詞
	動詞（活用語類）
不変化詞類	小詞（後接語），副詞（いわゆる「接続詞」「間投詞」を含む）

まず、語幹が格語尾・活用語尾²を接続するか否かによって、変化詞類・不変化詞類に分類し、格語尾を接続する語幹（曲用語類）を名詞類、活用語尾を接続する語幹を動詞と認める。不変化詞は自立語と付属語にわけ、自立語を副詞、付属語を小詞とする。名詞類は統語的特徴に応じて下位分類する。

先述のとおり、Luvsanvandan 編 (1966) の分類では名詞類および動詞以外の品詞（表 1、副詞以降）における分類基準が不明確であった。山越 (2006) では同じ対象について、自立的か非自立的かという点をもとに不変化詞にふたつの品詞を設定し、その基準を明確にした。また、品詞を横断する形での品詞（Luvsanvandan 編 1966 における「代詞」）を排除し、網羅的かつ過不足のない分類とした。以上から、Luvsanvandan 編 (1966) に見られた問題点は回避されている。

3. 分類上の問題点

上述した山越 (2006) における品詞分類は、語彙を客観的に分類するという点では Luvsanvandan 編 (1966) に比べ有効である。シネヘン・ブリヤート語を含むモンゴル諸語において、単一の語幹が格語尾・活用語尾の双方の語尾をとりうるということは本来ない。名詞語幹と動詞語幹とが明確に区別されるのが一般的である。そのため上記の分類基準は名詞類／動詞／副詞／小詞にかんしていえば相補的分

² 名詞語幹がとりうる格語尾として、主格（ゼロ語尾）、属格、対格、不定対格（ゼロ語尾）、与位格、奪格、具格、共同格、方向格の9種を認める（山越2006:279）。動詞語幹がとりうる活用語尾としては、直説法終止形語尾として過去／現在／未来の3種、希求法終止形語尾として人称、数などに応じた9種、分詞（本稿における「形動詞」）語尾として未来／完了／不完了／習慣の4種、等位節・従属節を形成する副動詞語尾として完了／不完了／並列／条件／限界／継続／継起の7種をそれぞれ認める（ibid.）。第4節で述べるが、これらの語尾を伴っていない要素を「語幹」として認める。名詞の数、動詞の数、ヴォイスなどの文法要素は、語幹に接続することであらたに語幹を形成する派生接尾辞に含める。変化詞類内部の承接関係は、概略次のように示すことができる。：[語根（-派生接尾辞）] 語幹-語尾；派生接尾辞は複数接続しうる。

布をなしており、原則として過不足なくすべての語彙をカバーできるということになる。しかし、こうした分類基準においてもいくつか例外が見られる。以下、分類上の判断に迷う例外について見ていく。

3.1. 「形動詞」

シネヘン・ブリヤート語の動詞はおおきく 3 種類の活用語尾類を接続する。Luvsanvandan 編 (1966) にみられる形動詞・副動詞・定動詞をつくるための語尾である。それぞれテンス・アスペクト・人称などに応じた数種の活用語尾をもち、統語的に異なる役割を果たす。「形動詞」は名詞に先行して名詞修飾をおこなう名詞修飾機能 (3)、述部となる叙述機能 (4) を有する。さらに、それ自体（もしくは「形動詞」を要とする文要素）が名詞（節）として機能し、格語尾をあらたにとる (5)(6)。名詞修飾機能、叙述機能を持つ、格語尾をとるという点は形容詞の特徴と同一であり、「形容詞化」ともとることができる。

- (3) *ons^la-xa* *bis^lig.* / *xebt-ee* *nəxoi.*
 読む-FUTP 本 / 横になる-IPFVP 犬
 「教科書；読本」 / 「寝そべっている犬」
- (4) *s^lad-xa = s^l.* / *əs^l-ɔɔ = b^l.*
 できる-FUTP=2SG / 着く-IPFVP=1SG
 「お前はできる」 / 「俺は行った」
- (5) *tan-ahaa* *hor-x-aar* *ende* *ir-ee = b^l.*
 2PL-ABL 尋ねる-FUTP-INS ここに 来る-IPFVP=1SG
 「お尋ねしたくてここに来ました」
- (6) *ende* *ir-xe-de = mni* *ta* *ugui = hen.*
 ここに 来る-FUTP-DAT=1SG.POSS 2PL.NOM ない=PFV
 「私がここに来たときには（あなたは）いませんでした」

ここで問題となるのは、その「形容詞化」という点である。形容詞同様、「形動詞」も (5)(6) のようにあらたに格語尾を接続することができる。そのため、形態論的観点から名詞類に分類される可能性が出てくる³。

しかし実際には「形動詞」は動詞の他の活用と同じく、それ自体が名詞項を要求する。つまり動詞としての性格を強く残しており、統語的観点からは「名詞類」とは区別すべきといえる。

³ Luvsanvandan (1967) ではこの形動詞も含め、名詞類と認めている。

山越 (2006) の分類基準では「語」レベルではなく「語幹 (形態素)」レベルで品詞を認定していることから、「形動詞」自体がすでに「語幹-語尾」=「語」として確立している、とみなすことで問題を回避できる。ただしその場合、「語幹」をどのように定義すべきか、また単に形動詞を動詞の範疇に含めるためだけに語幹を設定する必要があるのかが問題となる。この点については第 4 節で再度検討する。

3.2. 中国語からの借用語

前節で「単一の語幹が格語尾・活用語尾の双方の語尾をとりうるということは本来ない」と述べたが、シネヘン・ブリヤート語において近年大量に用いられつつある中国語⁴からの借用語においては、名詞類/動詞双方の語幹として機能するものが多く見られる (山越 2005: 195-197)。

- (7) *tere* *nⁱoo-g-aa* *nⁱoo-zⁱai-na*.
 3SG.NOM *Chi.* 尿-E-REFL *Chi.* 尿-PROG-PRES
 「あの人は用を足している」
- (8a) *manai* *zⁱeehun-hen* *uder*.
 1PL.GEN *Chi.* 結婚-PFVP 日
 「われわれの結婚した日」
- (8b) *manai* *zⁱeehun-ei* *uder*.
 1PL.GEN *Chi.* 結婚-GEN 日
 「われわれの結婚の日」

このため、名詞と動詞のあいだに重なる部分があり、相補的分布をなさなくなる。同様の現象はシネヘン・ブリヤート語に限らず、中国語との恒常的接触がおこっているモンゴル語の方言にもみられる (e.g. 蓮見 1998)。

一方中国語を除く他の言語に由来する借用動詞は、すべて名詞に動詞派生接尾辞が接続することで動詞語幹を形成する。山越 (2005) でも指摘しているとおり、ロシア語・モンゴル語からの借用語にはこのような現象はみられず、借用語彙が動詞として用いられる際には、必ず出名動詞派生接尾辞が接続する。中国語からの借用語にのみ、こうした名詞/動詞同語幹の語彙がみられるという点は、中国語において語の形態的特徴が品詞分類のてがかりとなっていないことに原因があ

⁴ 第1節で述べたとおり、シネヘン・ブリヤート語話者のほとんどが中国語・モンゴル語とのポリグロットである。そのため、用いられる中国語語彙が借用か、コード切替かという点が問題となるが、山越 (2005) では中国語の声調が失われ、シネヘン・ブリヤート語のピッチアクセント体系に変化していることを判断基準としている。

るとみていいだろう。こうした借用語彙は、マーカー（語尾）を接続してはじめて文中での機能が決まる。つまり、「語幹」レベルでの品詞認定ができない。「形動詞」と同じく、ここでも「語幹」という問題が残る。

3.3. 非動詞語幹への活用語尾接続

筆者が確認しているのは一例のみだが、特定の活用語尾が「動詞」以外の品詞に接続するケースがある。聞き手にものを渡すときにもちいる *mai*「ほら／どうぞ」が、聞き手が話し手よりも上位の場合、2人称依頼語尾 *-gtii* をともなっており（9b）。通常の動詞に *-gtii* が接続する（9a）と対比して示す。

(9a)	<i>naasⁱ-aa</i>	<i>ir.</i>	/	<i>naasⁱ-aa</i>	<i>ir-e-gtii.</i>
	こっち-REFL	来る(IMP)	/	こっち-REFL	来る-E-REQ
		「こっちへ来い」	/		「こっちへ来てください」
(9b)	<i>mai.</i>		/	<i>mai-gtii.</i>	
	ほら		/	ほら-REQ	
	「ほらよ」		/	「どうぞ」	

この *mai* に対応する語彙が同系のモンゴル語にもみられる (*Mon. mai*) が、モンゴル語にはこうした待遇関係による形態的差異はみられない（そもそも目上に対して *mai* を用いることは少ない）。*mai* は単一で文を構成することから、ごく「一般的」な品詞の認め方を取り入れれば「間投詞」に分類される。表2の分類基準にしたがってモンゴル語の品詞を分類すれば *mai* は「副詞」となる。しかし、限定的とはいえ変化（活用語尾の接続）が見られるという点で、シネヘン・ブリヤート語の *mai* は動詞の形態的特徴も有していることになる。

4. 語幹の認定

3.1 では「形動詞」がすでに「語」として完結した形式だとみなすことで問題の解決につながる可能性があるとして述べた。しかしその場合、「語」や「語幹」をどのように設定するかが難しくなる。「形動詞（動詞語幹-語尾）」を「語」とみなすのであれば、単純に「活用語尾、格語尾がひとつも接続していない形式」を「語幹」と設定することで、分析上問題を回避することはできる。たとえば、次の(10)では *horxaar* の語幹を、具格語尾が接続していない状態の *horxa* (=形動詞未来形) ではなく、何も語尾が接続していない *hor* を語幹に設定するというのである。

(10)	<i>hor.</i>	<i>hor-xa.</i>	<i>hor-x-aar.</i>
------	-------------	----------------	-------------------

尋ねる	尋ねる-FUTP	尋ねる-FUTP-INS
「？」	「尋ねる（こと）」	「尋ねることで」

しかし、シネヘン・ブリアート語では、名詞語幹に語尾が接続していない形式は「主格」として、動詞語幹に語尾が接続していない形式は「2人称命令」として機能する。このとき、名詞語幹＝主格、動詞語幹＝2人称命令とするより、[名詞語幹- \emptyset]＝主格や[動詞語幹- \emptyset]＝2人称命令形として分析するほうがパラダイムを考えるうえでも「語」として表出していることを示すうえでも有効である。

しかし、そこでの「語」／「語幹」の区別（- \emptyset があるか／ないか）は分析上（記述の観点からは）可能であり、必要であっても、このようなかたちで語幹を設定し、そこから品詞を認めていくという分類基準は話者の実感からは乖離しているだろう。品詞分類が何のためにあるのかという点にかかわるが、仮に「語学」上の分類であるとするならば、話者の実感からかけはなれた分類基準をとることは望ましくない。

(11)	<i>hor.</i>	<i>hor-\emptyset.</i>
	尋ねる	尋ねる-IMP
	「？」	「尋ねる」

(12)	<i>bis^jig.</i>	<i>bis^jig-\emptyset.</i>
	本	本-NOM
	「？」	「本」

回避の可能性を見いだせそうな分析上の「（変化詞類の）語幹」のもうひとつの基準は「（形態論上）すべての格語尾を接続可能か／すべての活用語尾を接続可能か」というものである。たとえば、「形動詞」は格語尾を接続可能であるが、共同格語尾を接続した例があまり確認されない⁵。

(13)	<i>hor-xa.</i>	<i>hor-x-iin.</i>	<i>hor-xa-da.</i>
	尋ねる-FUTP	尋ねる-FUTP-GEN	尋ねる-FUTP-DAT
	「尋ねる」	「尋ねることの」	「尋ねるときに」
	<i>hor-x-ijji.</i>	<i>hor-x-ahaa.</i>	? <i>hor-xa-tai.</i>
	尋ねる-FUTP-ACC	尋ねる-FUTP-ABL	尋ねる-FUTP-COM
	「尋ねることを」	「尋ねるよりも」	「？」

⁵ 通時的分析から、形動詞未完了語尾に共同格語尾が接続したと考えられる形式は存在する（e.g. *oj-aa-tai*. [つなぐ-IPFVP-COM]「つながれている」, etc.）。しかしこうした形式はすでに語彙化しており、共時的な生産性を失っているとみられる。

一方、通常の「名詞類」は、すべての格語尾をとりうる。つまり、格パラダイムが整っていることをもって「名詞語幹」と認め、パラダイムが完全ではない「形動詞」は語幹として認めないという条件である。これに従うと、「形動詞」はあくまで動詞の変化形の一類であり、名詞語幹ではないということになる。

3.3 の *mai* についても、*-gtii* 以外の活用語尾を接続しない (14) ことから動詞語幹とは認められなくなる。

(14)	<i>*mai-g-aarai.</i>	<i>*mai-na.</i>	<i>*mai-han.</i>
	ほら-E-IMP.FUT	ほら-PRES	ほら-PFVP

このように完全なパラダイムを持ち得ないという特徴は、形動詞が統語的に動詞としての性質を残している (3.1) ことと同様に、形動詞が動詞としての (そして *mai* が非動詞としての) 形態的特徴をもつことを示しているといえる。

中国語からの借用語彙が名詞／動詞双方に機能するという 3.2 の問題についても、このパラダイムをなすかどうかを判断基準とすることで問題を回避できる。これら借用語彙は、実際には動詞として用いられる場合には制限があるためである。借用語彙による動詞表現は、形動詞もしくは終止形として用いられる例は確認されているが、これまで命令形や一部の副動詞の形式は確認されない。(15b) にあるように、たとえば命令形を用いるような場面では出名動詞派生接尾辞が接続する。

(15a)	<i>tere</i>	<i>s^jambaa-g-aa.</i>	
	3SG.NOM	<i>Chi.</i> 上班-E-IPFVP	
		「あいつは出勤した」	
(15b)	<i>xordan</i>	<i>s^jambaa-I-ø.</i>	<i>(*s^jambaa-ø.)</i>
	早く	<i>Chi.</i> 上班-[N>V]-IMP	<i>Chi.</i> 上班-IMP
		「早く出勤しろ」	

一方で、名詞として用いられる場合には、意味論・語用論的条件さえととのえればすべての格語尾が接続しうる。つまり、名詞としての格のパラダイムをなすのに対して、動詞としてのパラダイムは不完全となっている。3.2 では語幹レベルで品詞を認定できないとした。しかし、「借用語彙はいずれも本来は名詞であり、動詞的に用いられる場合もある」とすることで語幹レベルでの認定が可能となる。

語幹がどこまでなのかという意識が話者にあるのかどうか、さらにそういった意識が明らかではないにもかかわらず、「語幹」レベルで品詞を認定してよいのかどうかについてはいまだ問題が残る。しかし、すくなくとも語幹を設定するこ

とで第3節であげた例外のいずれについても問題を回避できるようになる。つまり、これら例外を客観的に分類する手段として、語幹の設定と語幹レベル、つまり形態素レベルでの品詞の認定は重要である。そのためにも「パラダイムをなすかどうか」に語幹の基準を求めるのは妥当だろうし、語幹レベルで品詞を区別することが最善の方法といえる。

以上より、「語幹」の定義を客観的におこなうことで第3節にあげたような品詞分類上の問題点は回避でき、シネヘン・ブリヤート語の品詞は形態的基準によって分類可能であるということがいえる。

5. 品詞の存在と分類の必要性

第3節にあげた三つの例外は、それぞれの語（語類）に備わっている意味・機能的性質によって引き起こされたと推測される。

中国語からの借用語が名詞語幹にも動詞語幹にもなりうる現象は、すでに述べたように借用もとである中国語の特徴によって引き起こされていると考えられる。中国語とのバイリンガルであるシネヘン・ブリヤート語話者は中国語の「中国語のような孤立語型の言語では、その語は何ら形態的特徴を持っていないので、形態論的に品詞をたてることができない」（亀井・河野・千野編 1996:1119 「品詞」の項）と言われるように、中国語では、ある語が文法上名詞的（項となる）にも動詞的（叙述機能を担う）にもふるまうことができる。

(7)(8)のように中国語からの借用語彙のみがそのまま動詞語幹として用いられるのは、中国語において「結婚」などの語彙が名詞（としての統語役割）・動詞（としての統語役割）双方の機能を担うと話者が認識しているためと考えられる。このとき、学校教育等によって「品詞」の存在が話者にすりこまれている可能性も否定できない。ただし修学前の児童が(7)のような発話をおこなうことをみると、「品詞」をあるべきものとしてとらえているわけではないことがうかがえる。

ときに中国語は「品詞分類できない」（沈 2008:4）とも主張されることがある。しかし話者が名詞／動詞の機能を認識していないとしたら、中国語との併存状態にあるシネヘン・ブリヤート語をはじめとするモンゴル諸語に、こうした借用現象が起こることはないだろう。

つまり、形態論的観点から品詞を区別できない中国語においても、なんらかの品詞の区別はあるということになる。形態論的に区別可能なモンゴル系の言語と、区別できない中国語とのあいだに共通するような品詞分類の客観的基準を設定することは不可能だろう。しかし名詞、もしくは動詞としての意味・機能的共通点を見つけることは可能だろう。名詞は「モノ」、動詞は「動作」をあらわすという古典的な意味的分類を肯定するわけではないが、やはり何らかの意味・機能的差異が、一方（モンゴル系の言語）では形態的差異、一方（中国語）では統語役割上の差異として反映されるとみるのが妥当と思われる。

そのようにとらえれば、*mai*「ほら」における2人称依頼語尾-*gtii*の接続にかんしても、「ものを渡す」動作と密接に結びついた語であるからこそ、話者は「動作」をあらわす語として認識しやすく、その結果活用語尾をつなげるようになったと解釈しうる。

品詞分類、とくに名詞と動詞の区別が困難とされるような言語は、孤立的言語以外にもみられる(e.g. 笹間 2002, 中山 2008, 渡辺 2008)。こうした言語においてもすべて品詞分類が可能であるのかどうかは判断しかねるが、少なくともシネヘン・ブリヤート語においては形態・統語的観点から品詞を分類することが可能であり、かつ記述のために必要であると結論づけられる。

6. おわりに

以上、モンゴル諸語のひとつ、シネヘン・ブリヤート語における品詞分類の基準について検討したうえで、「品詞」の必要性について簡単ではあるが考察した。シネヘン・ブリヤート語のように膠着的性格の強い言語では形態的特徴による客観的な品詞分類が可能かつ妥当であること、そうした特徴をもたない中国語においても、シネヘン・ブリヤート語話者はなんらかの手がかりに応じて名詞と動詞とを暗に区別していることを指摘した。

「品詞」というカテゴリーは、伝統文法からはじまり「当然」存在するものとしてとらえられ、それが文法的基準にもとづいて定義されるべきものとして意識されてきている。しかし、かならずしもすべての言語に一貫した分類基準があるとはいえないだろう。また、本稿では「語幹」を分類の対象としたが、そもそも「語幹」ではなく「語」を分類の対象とする言語もあるだろう。人間言語に普遍的な名詞・動詞の特徴は何か、という点については今後も検討の余地が大いに残されている。

そうであってもすくなくとも「語(もしくは語幹)」はいくつかのグループに分けることが可能であり、そのうちでもっとも多く言語に共通しているであろう分類が、名詞的な語類と動詞的な語類との区分だろうということ、またそれは話者意識から完全に乖離しているわけではないことは認められるのではないだろうか。

とくに文法記述の際、そうしたふるまいの異なる語の集合をいくつかに分類することは便宜のうえでも重要であるし、当該言語の姿を他者に「見せる」際にも必要な方法だろう。「分類するから品詞がある」ように見える、というのではなく、ふるまいに「差異があるからこそその品詞」分類であると考えられる。

略号・記号

- 形態素境界; = 倚辞境界; 1,2,3 1,2,3人称; A 形容詞; ABL 奪格; ACC 対格; *Chi.* 中国語からの借用; COM 共同格 DAT 与位格; E 挿入音; FUT 未来; GEN 属格; IMP 命令; INS 具格; IPFV 未完了; *Mon.* モンゴル語; [N>V] 出名動詞派生接尾辞; NOM 主

格; ...P 形動詞; PFV 完了; PL 複数; POP 後置詞; POSS 所有; PRES 現在; PROG 進行; REFL 再帰所有; REQ 依頼; SG 単数

本研究のデータ

本稿でとりあげたデータは、シネヘン・ブリヤート語母語話者の次の方々から提供いただいた：ドンドク氏，テムセル氏，バヤスゴラン氏（いずれも男性，中国内蒙古自治区在住）。本稿の内容は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所における研究会（重点共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論：「語」の内部構造と統語機能を中心に』平成19年度第2回('07-12-22)，第3回('08-03-01)研究会)で発表した内容をもとにしている。研究会上では品詞分類にかんする多くの見解が出され，本稿執筆の際のおおきな助けとなった。ここにあらためて謝意を表したい。ただし本稿の内容にかんしては，言うまでもなく筆者がその責任のすべてを負う。

本稿は，平成14-15年度科研費補助金特別研究員奨励費「モンゴル諸語における語形成および言語接触に関する研究」，平成17-18年度科研費補助金特別研究員奨励費「中国東北部の消滅に瀕したモンゴル諸語の記述および言語接触にかんする研究」，平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）「中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究」（課題番号：19820019）の助成による現地調査から得られた成果の一部である。

参 考 文 献

- 江畑冬生. 2006. 「サハ語」. 中山俊英・江畑冬生編. 『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』1. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp.25-50.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編. 1996. 『言語学大辞典』第6巻. 三省堂.
- 笹間史子. 2002. 津曲敏郎編. 「海岸ツィムシアン語における名詞と動詞の区別について」. 『環北太平洋の言語』8. 大阪学院大学情報学部. pp.1-10.
- 沈力. 2008. 「品詞に関する研究メモ」. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所重点共同研究プロジェクト『言語の構造的多様性と言語理論：「語」の内部構造と統語機能を中心に』2007年度第3回研究会資料.
- 中山俊秀. 2008. 「品詞分類の悩み」. 『言語』37(6). pp.100-101.
- 蓮見治雄. 1998. 「中国のモンゴル語あれこれ(3)」. 『中国語』462. pp.36-37.
- 山越康裕. 2005. 「シネヘン・ブリヤート語の借用にみられる諸特徴について」. 津曲敏郎編. 『環北太平洋の言語』12. pp. 185-205. 北海道大学大学院文学研究科.
- . 2006. 「シネヘン・ブリヤート語」. 中山俊秀・江畑冬生編. 『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』1. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp.71-298.
- 渡辺己. 2008. 「スライアモン・セイリッシュ語の名詞と動詞の分類について」. 『日本言語学会第136回大会予稿集』. 日本言語学会. pp.346-351.
- Luvsanvandan, Sh (ed.) 1966. *Orchin Tsagiin Mongol Xel Zui (Modern Mongolian Grammar)*. Ulaan baatar (Ulan-Bator): Ulsyn Xevleliin Erxlex Xoroo.
- Luvsanvandan, Sh. 1967. "Mongol xelnii ügsiig aimaglux tuxai asuudald" (On some problems of the word

classification in Mongolian). *Mongol Xel Sudlal*, 5. pp.15-50.